

知恵ある人の教えは命の“いずみ”である。(箴言13章14節)

編集: 愛宕町教会・総務部 発行者: 北 紀吉 発行所: 甲府市北口3-4-23 日本基督教団愛宕町教会 TEL 055-253-3150 URL <http://www.geocities.jp/atagomachikyukai/>み
こ
と
は

アブラハム、主を信ず

聖書 創世記第十五章一〜六節

牧師 北 紀吉

これらのことの後で、主の言葉が幻の中でアブラムに臨んだ。「恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きいであろう。アブラムは尋ねた。「わが神、主よ。わたしに何をくださいというのですか。わたしには子供がありません。家を継ぐのはダマスコのエリエゼルです。」アブラムは言葉をついだ。「御覧のとおり、あなたはわたしに子孫を与えてくださいませんか。だから、家の僕が跡を継ぐことになっていきます。」見よ、主の言葉があった。「その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなたから生まれる者が跡を継ぐ。」主は彼を外に連れ出して言われた。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」

アブラハムは、信仰の父とされます。改めて信仰とは何かに思いをはせたいと思います。神の言葉が幻の中でアブラハムに臨みました。神は言われるのです。「恐れるな、アブ

ラムよ。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きい」と。なぜ神は「恐れるな」と言われるのでしょうか。アブラハムにどんな恐れがあったのでしょうか。なければ「恐れるな」と言われることもないでしょう。実は、恐れというよりは、神への不信があるのです。だから、神を避けたいと思ひ、神にまみえることを恐れているのです。

「あなたの受ける報いは非常に大きい」と言われて、アブラハムの不満が口をついて出ます。アブラハムは尋ねます。「わが神、主よ。わたしに何をくださいというのですか。わたしには子供がありません」と。不満があつても「わが神、主よ」と親しく呼びかけるのは見事です。しかし、アブラハムにとって事態は深刻です。かつてハラムで父を失い、子孫もまだない時に、まさに未来を見いだせなかつた時に、神が御言葉をもって臨んでくださり、「あなたは生まれ故郷、父の家を離れてわたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民と

しあなたを祝福し、あなたの名を高める」と言つてくださり、彼は主の言葉に従つて旅立ったのです。しかし、アブラハムの子がないとの状況に何の変わりもありません。神が祝福し、大いなる国民とすると言われても、現実には子がなく、アブラハムには将来への希望がないままなのです。神の言葉に従つたのですが、神の報い(土地の約束)を感じ取れないのです。土地の約束があつても自分の代で終わってしまうなら、空しいにすぎません。

それゆえに、家を継ぐのはダマスコのエリエゼルだ、ということです。彼は、アブラハムの財産を継ぐことを条件に葬儀をしてくれるばかりと不平を言っているのです。アブラハムの不満が爆発します。「御覧のとおり、あなたはわたしに子孫を与えてくれませんか」と。神は、アブラハムに神への不満を吐き出させるのです。そのために突然、語りかけてくださったのです。

そして、言葉を下さるのです。「その者が跡を継ぐのではなく、あなたから生まれる者が跡を継ぐ」と。そのうえで神はアブラハムを外に連れ出して言われるのです。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい」と。「あなたの子孫はこのようになる」と。

こうして「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」というのです。一体どういうことでしょうか。アブラハムは何を信じたというのでしょうか。そして、神は、何をもちてアブラハムを義と認められたのでしょうか。アブラハムが神に連れ出されて見たものは、満天の星です(人工の明かりがない夜空の星は、まるで天から降つてきそうなくらいに輝いています)。

アブラハムが見たのは圧倒する神の創造の御業です。アブラハムは、神の創造の御業に圧倒されて、沈黙するほかはなかつたのです。あなたの約束が何になるのかと抗議するアブラハムに、神は圧倒するご自身の御業を示されることで、神に抗議するアブラハムが如何にちっぽけで取るに足りない者であるかを示されたのです。アブラハムは沈黙せざるを得ませんでした。まさに神への全面降伏。それを、神は信仰とみてくださり、義と、正しいとしてくださったのです。

信仰とは、神に白旗を上げることです。神への全面降伏です。まさに、そこでこそ、人は何にもまして神を神としている(義)のです。そして、神はその人を、正しいと、義としてくださるのであるのです。抗議する者から義なる者へ、それが神の大いなる御業です。

受洗にあたって

信仰告白

信仰告白



古屋 治樹

私が愛宕町教会の礼拝堂へ初めて入らせて頂いたのは、長男秀樹と嫁律子が、故鈴木牧師先生のお導きによつて結婚式を挙げた1984年4月29日でした。

それから今日まで、息子夫婦に勧められて、日曜日に礼拝へ足を運ぶようにと心がけて来ましたが、主日礼拝を守ることが思うようにできませんでした。それは、私が、町内の文化部活動や自治会活動それに地区自治会連合会活動などの役員を20数年間続けてきたからです。これらの活動の関連行事は日曜日に行われることが多く、どうしてもそちらを優先しなければなりませんでした。

それでも、月に1〜2度、主日礼拝に出席していた時期もありました。また、クリスマス・イヴ礼拝には毎年出席して厳肅な雰囲気の中でイエス・キリストの誕生をお祝いしてきました。しかし、洗

礼を受けて教会員になることへの決意はつきませんでした。それは、私が山梨市三富にあつた古屋家の長男で、私の父親は檀家総代を長く務めていたので、寺の住職とも大変親しい付き合いをしていたからです。

けれども、戦後、この僧侶は田舎の貧しい寺を嫌つて、塩山市の他宗派の寺へ転籍してしまい、寺は無住になりました。また、私は昭和27年4月甲府市立小学校へ転勤になりましたので、住所も甲府へ移りました。それでも、数年経つて父母が亡くなってからは、代理の僧侶が盆の8月14日には必ず甲府の我が家へ見えて、父母の仏前にお経をあげてくれました。

ところが2010年、家の新築のためにお断りしたところ、それ以来見えなくなりしました。

このように、お寺との長い関係がいつの間にか薄くなって来ていたところ、2011年11月28日に北牧師先生がお見えになり、洗礼を受けるよう勧めてくださいました。それで、家内と話し合い、二人一緒に洗礼を受けることを決心いたしました。

私が愛宕町教会でいつも感心していることは、教会員同志の交わりが温かいことです。礼拝後の交わりコーナーでの会員の皆様同志の温かい交流の様子は、私など会員でない者が見ていて、感心していました。その上、会員でない私に対しても分け隔てなく接して下さいるので、教会へ足を運ぶ力になつておりました。

その理由が、先日、牧師先生の個人指導を頂いて分かりました。牧師先生は「教会は信仰を同じくする者の共同体であ

り、群れである」と教えて下さいました。また、私は、これまでに「教会一致懇談会聖歌隊」で3年、「メサイア合唱団」では10年、仲間に入れて頂き、毎週の練習と年末の発表会のステージに立たせて頂きました。忘れることのできない思い出です。

私事ですが、昨年、神様のお導きにより、家の新築を行うことができました。北牧師先生には、古い家の解体や新しい家の基礎式で、工事の無事に終わることと新しい家への祝福を祈つて頂きました。今年に入り、家の新築が完了しましたので、改まった気持ちで主日礼拝を守ろうと思ひ、3月13日の第2主日礼拝から今日まで35回礼拝を守つて来ました。

私どもも高齢になり、聴力が落ちたので、牧師先生のお話の細かいところが聴き取りにくくなり、実は説教の時間を少し苦痛に感じていました。この私どもを励ますように、受付当番の役員さんが、私と家内の氏名札を付けた受信器を貸して下さいました。今は、この受信器のお陰で、牧師先生のお話のはつきり聴き取れるようになり、説教の時間が楽しくなりました。

神様がその独り子である主イエスを私たちに送つてくださり、その十字架の死によつて私たちの罪を赦し、主の復活によつて私たちに永遠の命の希望を与えて下さったこと、そのキリスト教の救いの福音も少しは分かるようになりました。これからは、主イエス・キリストを救い主と信じて神様に全てを委ね、残り少ない人生を生きていきたいと思ひます。

このように老いてからはあります。が、皆様のお仲間に加えて頂けることを

大変嬉しく思つております。どうかよろしくお願いいたします。

(二〇一二年十二月二五日、

クリスマス礼拝にて受洗)

信仰告白



古屋 美子

私の家は、代々仏教を信仰しておりまして、私の母親は、私の父親が、私が三歳の時他界し、兄も戦死し、不幸な身の上でしたので、特に信仰が厚かつたと思ひます。それで、子どもの時から毎朝お祈りをする習慣になつておりました。また、結婚してからも主人は古屋の長男でしたので、仏壇を守つて参りました。

そして、私は、戦時中に育つた者です。のでキリスト教にふれる事なく過ごしてきました。

でも、息子と娘が高校生の時に洗礼を受けたいという事を主人と私に相談して来ました時、時代も変わり民主主義の時代ですので、素直に、信仰を持つ事は良い事だと同意しました。その事によつて、息子たちの結婚式は愛宕町教会で挙げていただきました。

その後、嫁の律子さんも洗礼を受け二人の信仰は益々深くなり、家に於いても

祈りの時を共に過ごしております。

その間、私たち夫婦も礼拝に出席するようになったものの、洗礼を受ける決心はなかなかつきませんでした。家を新築するについて北牧師には何かにつけお祈りをいただき、新しい家で平穏な生活が出来るようになりました。息子たちの信仰により神様が恵みをお与えくださったのだと感謝しております。

私も老夫婦もこの度洗礼をお受けして、残りの人生を神様に委ね、お祈り申し上げ、礼拝を守りたいと思っております。

(二〇一二年十二月二五日、
クリスマス礼拝にて受洗)

信仰告白



弓田 愛美

私の家は、家族全員、教会に行つています。

おじいちゃんは教会学校の校長先生をやつていて、おばあちゃんは、ほとんど毎週教会に通つて、お父さんは教会学校の先生をしていて、お母さんは、礼拝の時たまに伴奏者をしています。お姉ちゃんは6年生のイースターの時、洗礼を受けて、妹たちは毎週楽しそうに教会学校

に通つています。

私は、小学校4年生の時に、洗礼を受けるなら、6年のイースターかクリスマスにしようと思つていました。そして、6年生になった時、あつという間にイースターが来てしまったので、考えて、クリスマスに洗礼を受けたいと、一学期の終わりに、お母さんに言いました。そして、おばあちゃんとおじいちゃんに相談して、北先生に話しました。みんなとても喜んでくれました。

私は、5年生の時から、毎晩、幼稚園の卒園式にもらつた新約聖書を読んでいて、一回全部読み終わつて、もう一回また読んでいます。聖書は、少し、むずかしいですが、なるべく理解しようと思つて読んでいます。

私は、神様は、いつも、どこかで見守つて下さる方だと思います。なにか困つた時があり、そして、おいのりするとなにか教えてくれるみたいに、解決方法がわかってきます。それは、神様が本当にいるんだと思うしゅん間でもあります。これからも、神様を信じて、いのり、神様を礼拝して行きたいと思つています。

(二〇一二年十二月二五日、

クリスマス礼拝にて受洗)



転入会しました！

転入会しました



石垣 忍

《「無年金だけど希望」
日々感謝》

愛宕町教会へ導かれて、もうすぐ一年になります。

よく、「石垣さん、年金は？」と言われます。もうじき62歳です。厚生年金が無いと、国民年金だけだと大変だということの中で……。

なんと無年金、その一言でどんな人生を歩んで来たのか、分かりますよね。多重債務者になりました。保証人になったとかではなく、かなりカッコ悪いのだが、単に私が「浪費家」だっただけです。途中までは、特別にぜいたくをしているという自覚もなく、ただ毎日楽しく過ごしてただけで、今考えると「自覚がない」ということが一番問題だったと思います。

部下たちに慕われていたというより、毎晩のように飲み連れ回していた。その当時は、競馬とパチンコ、土、日曜は

ウインズ(場外馬券売り場)とパチンコが習慣でした。たまには儲かることもあったが、惨敗でした。一攫千金を狙つてスッカラカンになる日もありました。利那的な楽しみに生き「ちゃんと仕事をして、自分で稼いだ金を自分の好きなように使っているだけだ」と思っていました。勢いに任せて飲み歩き、給料はギャンブルにつき込む生活をしているうちに借金が増えていきました。

このような御言葉が与えられました(アウグスティヌスがさまざまな遍歴を経て苦悩の中にいた時、聖書を開いたら、この言葉があり、それを読んで平安に満たされたという有名な回心のエピソード)。「遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく、昼間らしい、正しい生き方をしようではありませんか。主イエス・キリストを着なさい。肉の欲のために心を用いてはいけません」(ローマ人への手紙13章13・14節)

生活の立て直しを「什一献金」からと導かれました(神恩感謝・献身のしるし)。与えられているすべてのものが神からの賜物であることを深く知り、それにより生かされていることを感謝できるようなることです。洗礼により、私という存在が百パーセント主のものとされる事実です。献金は福音による喜びの出来事であります。

「お金」に勝利する。私たちが養われる神に身を委ねることを知ることができ

ます。さらに、このような御言葉が与えられました。「わたしたちはこの御子においで、その血によって贖われ、罪を赦されました。これは、神の豊かな恵みによるものです」(エペソ人への手紙1章7

通っている教会で洗礼を受けました。
 初めて教会に足を踏み入れたのは、ソウルで仕事をするために、会社近くの家に部屋を借りたのがきっかけでした。すぐ隣の建物が教会だったので、毎日、朝から早朝礼拝のための祈りの声や讃美歌の歌声が聞こえて、うるさいなあと思っただけです。

でも、何となく気になってしまい、ある日の朝、その歌声に誘われて、教会の礼拝堂に入ってみました。5、6人くらいの方が、椅子も置いていない冷たい床の上で一生懸命に祈りをする姿が目に入りました。そして、戸惑いながらも、私も一緒に祈ったのです。

不思議なことに、祈ると、その場所がすごく馴染んだような気がして落ち着きました。神様の慈しみと愛によって、私は救われました。

そして、20年前に、ここ日本に来る時に、ヨシユア記1章5〜9節にある御言葉が「強く、雄々しくあれ。…うろたえてはならない。おののいてはならない。あなたがどこに行ってもあなたの神、主は共にいる」と、私を励まして下さいました。

その御言葉の通りに、神様は私を愛宕町教会に導いて下さり、今年の3月、転入しました。すべての出来事は、神様の素晴らしい愛と慈しみによる印だったと思います。

これからも、神様の福音を宣べ伝えながら、愛する兄弟たち姉妹たちと共に、歩んで行くつもりです。

神様の大きな恵みが愛宕町教会にあるように祈りながら…。

(二〇一二年三月十一日、

主日礼拝にて転入)

証詞・感話

2011年2月24日 祈禱会

証詞

わたしの一日



荻野あゆみ

ハア〜どっこいしょと…何をするのも枕詞、少し前までは、わざと使っていたのに、この頃はこの言葉から起動になったねえ

朝は、携帯のアラームで起こされて、ジワーっと目が覚めてきて…ああ〜朝だあ

そういえば、子どもの頃から、朝は苦手だったなあ
 夜はまあまあ得意だったけど、最近は9時すぎると眠くなっちゃうし…

得意なこと減ってきたねえ
 あれ、もうこんな時間だ、出かけないと遅刻しちゃうよ

今日はスムーズ、だけど良事魔多しだから気をつけ
 ないとね
 うつつ夢中でデーター入力していたら、首がかたまってる〜

動かないじゃん、ちょっとガンバルと、直ぐ肩や腰にくるなあ

画面も、小さい文字は見えにくいし、うまく焦点が合わない…もしや老眼かな

そういえば私、今年52になるじゃん、体はおばさん通り過ぎて、おばーさん

50といえば、初老だものねえ

初老だあ〜なんて云うと、諸先輩方にガツリ叱られるよねー

初老の自身がこまった、これほど心が幼稚だとパランス悪いよなあ

心って、どうしたら成長するのだろうか
 心ころころ

しまった、今日しなきゃいけない仕事一つわすれてたあ

終業までにできるだろうか、あせる〜
 キーッツこういうときに限って、電話がよくかかってくる、

エッ何、セールの電話、こういう電話かける人ってどういう人なのだろう

あ〜くたびれたー

暑いと疲れるよね…なんて、冬になれば寒くて体が動かないかと思うんだよねー

我ながらしょうがないよね
 洗濯物かたづけて、庭に水まいて…少しは涼しくなる・ならないかあ

ご飯の支度暑いよねー、今日も素麺？
 7時半すぎたらドライかけよー、ささやか節電

涼しくなると…

ああ眠くなってきた…、今日はもういいや、寝ちゃおう

…と、こんなふうに一日が過ぎてゆきます
 私のころころ、おしゃべりの相手は、

少しのよどみもなく、しゃべり続ける私の話を、
 それは忍耐強くきいて

時には、まるで自分が気がついたような
 錯覚を起こすぐらい絶妙に、

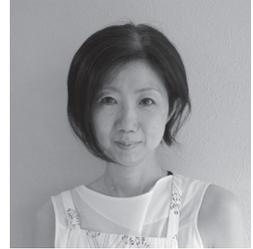
違う視点を提示してくれます。

私に分かるように、そこがすごいよね
 かみさま ありがとう

2011年4月28日 祈禱会

証詞

日々感謝



宮澤 陽美

私は1977年のクリスマスに受洗させて頂きました。

当時高校1年生、同級生の三井しおみさんが、戸泉さんと一緒に洗礼を受けないかと、誘ってくれたのがきっかけだと記憶しています。

実は誘われるまで、洗礼を受けるなどは夢にも思っていないませんでした。

よく覚えていませんが、断る理由もなかったの…みたいな感じだったと思います。

その後も、学校や就職を決めるのも消去法、強い意志や希望も無く流されるまま…。

どうして何かに興味をもつたり、頑張ったり出来ないのかとよく思いました。

そんな私ですが、今までも、今も、幸せだと感じています。

頑張らない私ですが、神様は望む以上のものを備えてくださいます。

この恵みは神様からの一方的な恵みだと、日々感謝しています。

2011年6月23日 祈禱会

証詞

神様が
敷いて下さった道

弓田 覚志

私は、昭和40年(1965年)1月16日(土)に父、覚造、母、礼子の長男として東京都小金井市に生まれました。両親ともクリスチャンで、父は文京区の中学校の音楽の教師(実家は静岡県掛川市で和食料理屋)、母は実家が日本基督教団小金井教会で、同じ敷地内にある小金井教会幼稚園の幼稚園教諭をしていました。

母方の祖父は小金井教会の初代牧師、幼稚園の初代園長、武南高志で大変厳しい牧師だったそうです。また幼児教育に対して、大変力を注いでいたそうです。私が中学2年の時(1978年)に亡くなりましたが、私にとってはとても優しいおじいちゃん、日曜学校の頌栄541番の後の大きく両手を伸ばした祝祷の姿が、今も記憶に残っています。

祖父が亡くなってからは、柏井創牧師が二代目の牧師になり、祖母が幼稚園の園長になりました。祖母も母の話だと母が子供の頃は大変厳しく、よくほうきでお尻をたたかれていたようですが、私には怒ったこともなく、とてもやさしいおばあちゃんでした。そんなおばあちゃんに会いたくて、よく教会に行っていました。ただ父が渋谷にある単立の日本渋谷基督会という教会に行っていたため、家族全員その教会の会員でした。

私には2人の妹がおり、兄妹3人その教会で幼児洗礼を受けています。その教会にも私と年の近い子がいて(お兄さん2人、同級の女の子1人)、教会学校がない間はよく3階の牧師館で遊んでいました。そんな中で

育つため、教会生活は自分の中でも普通でした。もう一人私に神様のすばらしさを教えてくれた人がいます。それは母の姉の一人(母は8人兄弟、ただ3人亡くなっています)、修道院のシスターになった叔母がいます。その叔母も修道院内にある幼稚園の園長をしています(今も)。祖父母が元氣なときは、夏と正月に帰ってきて、よく遊んでくれました。でもその叔母からは、一度もお小遣いをもらったことがありませんでした。でもその代わり、神様の愛、人間の愛というもののすばらしさを教えてもらいました。

子供の頃は家族で渋谷の教会に行くことが多かったですが、中学を過ぎてからは自主性に任せてもらい、祖母会いたさに小金井教会へよく通っていました。中学3年頃から、教会学校の先生から、信仰告白をしないかとの話をされましたが、いずればするかもしれないが、素直に「うん」というのはいやだという、ひねくれた性格から断り続けていました。両親は祈っていたかもしれませんが、口には出しませんでした。

大学進学が決まり、今度は柏井牧師に呼ばれました。まず教会学校の教師をしないかとの話でした。これはかなり若い人が教師をしていたので、することにしました。もう一つは再び、信仰告白の話。これはここでも「まだ早い」と言って断りました。その当時、教会学校は幼稚園から高校生まで、120人はいいたと思います。私は小学校4年の担任になりましたが、小生意気な子どもばかりで、また私もまだ精神的に子どもだった事もあり(今でも子どもですが)大変だったことしか残っていません。また受洗すると話をしなくてはならないので、口下手で奥手で引っ込み思案で上がり性の私にとって(今でもその性格は治りませんが)、それがネックになり信仰告白は拒み続けました。

無事に何とか大学を4年間で卒業し、社会人になったとき、また柏井牧師から呼ばれました。その時は、大好きな祖母が自宅で脑梗塞で倒れて、入院生活を余儀なくされた時(その後10年間寝たきりで、病院、老人ホームの往復の生活でした)、おばあちゃんが喜んでくれるならという気持ちと、社会人になり学生生活と違い、訪

れるかもしれない様々な困難に神様の助けが必要になるかもしれないと思ひ、昭和62年(1987年)のペンテコステに父の教会から転会して、信仰告白をしました。その時も恥ずかしかつたので、両親には言わなかったのですが、しつかり礼拝に来ていました。でも礼拝後、周りから「おめでとう」とか、写真をなんて言われるのが恥ずかしくていやだったので、終わったら速攻でぬけたして、家に帰ったのを覚えています。

その後、教会学校で中高科の担当となり、小金井教会で知り合った鈴木真理さんのお父さんが牧師をしていた愛宕町教会と一緒に夏のキャンプをしたりして、いつの間にか、自分も甲府に来て、結婚をし、愛宕町教会の会員になっていました。自分は20代の頃、30歳になったら死ぬか、一生独身で小金井にずっと住むと思っていたのですが、まるで逆の人生になってしまいました。でも今思うと、結婚して山梨に来たのが30歳だったわけで、人生の第1部が終了して、第2部がスタートしたと思えば、納得いくかなと…。

子どもの頃、よく周りの人から、お父さんの後継いで先生にならないのとか、幼稚園で働かないのとか言われました。教師のように人を教える能力はないし、幼稚園は給料が少ないからならないと答えていました。でもこれも時は流れて、今保育園に勤めて、園児から「弓田先生」と呼ばれているのも、神様の計画のうちなのかなと思ひます。以前シスターの叔母が「覚志は神様が山梨に必要なだから遣わしたのよ」と言ってくれました。これからも神様が敷いて下さった道を歩んでいこうと思ひます。



2011年8月25日 祈祷会

証詞

生かされ、育てられ



荻野 淳子

私のこれまでの生活の中で、常に恵まれてきたと感謝していることは、人との関りということにおいては、家族・友人・職場の人たち、とこれまでいろいろな出会いがありました。神様の計画の下で、いつもその時の時のベストの人に出会わせてもらってきたと思ひます。

人間ですから、ちょっと自分とは違う、合わないなあと思う人がいるのは当然ですが、そんな人たちとも少しつき合ってみると自分とは違う考え方やよさを発見することができました。仕事の上でもいろいろな人と関わる機会はたくさんありますが、いつも人のプラスの面を見つづけることができるとよいなあと思ひています。

これまでの私の生活を振り返ってみると、何かたいへんなことがあった時も、いつも周りの人たちの助けや支えを受けて、本人はいたつてのんきに過ごしてきているように思ひます。周りの助けや支えについて、あらためて考えてみると本当にありがたいと思ひますが、日々の生活の中ではそんな感謝の気持ちも忘れがちになっていくのではないかと申し訳なく思ひます。

特に一番支えてもらっている家族や身近な人たちのことを考えさせられたのは、6年前に入院・手術を経験した時です。まだ子どもたちも小さく、突然の入院で家族には本当に心配させたいと思ひます。

入院中はふだん家にいる時とちがひ、いろいろなことに考えをめぐらせる時間がたっぷりあります。家のこと

や子ども達のこと、ちょうどその時に抱えていた仕事のことなど、いろいろな考えが湧き出ると心配になってしまふのですが、仕事帰りに顔を出してくれる主人と話をすることで安心して過ごすことができました。

手術では、生まれて初めて全身麻酔というものを経験しました。いろいろな説明を丁寧にしていただいて、今考えると不思議なほど不安な気持ちはなかったように思ひます。根がのんきな性格のせいかもしれません。なぜか「大丈夫」という変な確信がありました。私には何も言っていないで済んだが、きつと家族の方が心配して、祈ってくれていたと思ひます。

今私が一番心にかかっているのは、やはり子ども達の成長のことです。親としてみていて、4人のこどもたちはそれぞれが育っています。みなそれぞれ素直に育つてくれていると思ひます。小さい頃から教会のお友だちと一緒に育つてきているので、子どもの少ない中で育つた子にくらべて社会性のようなものが育つていないのではないかと思ひます。上の二人は中学生・高校生になり、小さい頃に比べると親としての心配の種類も変わってきました。私自身も親として成長していかなくてはならないと思ひます。

今の社会の状況を考えると、中学生・高校生の子ども達の生活の中は心配になってしまふようなことだらけです。そんな中で、上の二人の子ども達が中学生になることをきっかけに受洗したことは、喜びと共に私にとって安心することでもありました。どんな社会状況の中にあつても、神様によって繋がれていること、神様の子どもであることを心の芯にもつていてくれれば大丈夫、そんな気持ちになりました。

下の二人はまだ小さいですが、これからも教会に行くことや教会で過ごすことが自然な生活を続けて、いつか自分の心から信仰告白して教会に繋がるようになっていってほしいと思ひています。

子ども達と共に、私も日々の生活の中の恵みに感謝しながら、これからも成長していきたいと思ひます。

2011年度夏期伝道実習報告

神の言葉を語る

東京神学大学大学院1年

中西 康之



スクラップ・アンド・ビルド…それが、2011年度の夏期伝道における私の課題でした。今までの自分の学びや経験が、ほとんど役に立たない…古い自分が徹底的に崩され、新しい土台が据えられる…そのような体験が中心となりました。

以前の私には、「説教など、それほど難しくない」という驕りがあったのかもしれませんが。整った文体と論理構造で語れば、概ね納得してもらえる。そうした自惚れがあったのかもしれませんが。しかし、そのような人間的な思いで語れば語るほど、私の説教は福音から遠くなり、会衆を癒すどころか、逆に疲労感を与えてしまう「弁論」へと堕ちてしまうことに気付かされました。福音が正しく語られない説教は会衆に違和感を与え、また「食べ足りなさ」のようなモヤモヤを残してしまいます。

聖書は神の言葉であるがゆえに、説教者は聖書を通してお語りくださる神の言葉に傾聴し、神が御自らお語りくださるまで、ひたすら耳を傾けて待つ者でしかない。そうして御言葉が語られるとき、神がそこにおられ、私たちは共に神の救いに与り、そこにおられる神を讃美することができる…。与えられた諸集会の中で、このことこそ、今の自分に全く欠けていることだと実感しました。

説教をするとは、神の言葉を語ることであり、神の言葉は自分の知識ではなく、聖書に顕されている。説教者は聖書を真に神の言葉として聴き、自分の思いではなく、神の救いを語る者である。極めて初歩的なこのことが、神学校での学びの中で後退していたのかもしれませんが。確かに、聖書を学問的資料のように読むことも、聖書を正しく解釈するためには必要です。しかし、礼拝の説教は学問の成果を語る場ではなく、神の臨在と救いを語る場なのですから、自分の知識や経験の蓄積など、いつでも捨て去る覚悟がなければなりません。神学校の先生方も、そのように教えてくださってはいたのですが、愛宕町教会に来て、自分を覆っていた「余分な殻」が壊されるまで、本当の意味でそのことを理解することはできませんでした。夏期伝道とはまさに、古い自分が壊され、新しい土台が据えられる経験だということができると思います。

もう一つ、説教を語る上で重要なことが示されました。それは、教義をしっかりと理解するということです。ギリシャ語やヘブライ語の聖書を読み、註解書を読んで、説教箇所の釈義をするだけでは不十分だということを知られました。旧・新約聖書全体の中

で、その説教箇所はどのような位置付けがなされているのか。教義的に、その聖書箇所は何を語っている箇所なのか。創造なのか、贖罪なのか…そのことを理解していないと、とんでもなく的外れな説教になってしまうことを改めて知りました。

そのような私に対し、北先生は「難しい教義学の本を読め」とはおっしゃいませんでした。そうではなく、中高生向けに書かれた基本的な教理本を改めてしっかりと学び、しかも、自分の言葉で教義を言い表すことが重要であることを教えられたのです。

いずれにしても、基本を見失ってはいけないということがいえると思います。基本とはもちろん、聖書が神の言葉であり、信仰の書でもあるということです。基本というよりは、それがすべてであるといえるでしょう。信仰の書として聖書を読むためには、自分の知識に頼るのではなく、今ここにおられ、聖書を正しく解釈させてくださる聖霊の力に信頼することが第一であること…信徒の方々には常識的なこのことが、「にわか勉強」の神学生にとっては見失いやすい事柄なのかもしれません。神学生よりも信徒の方々の方が、聖書の御言葉を正しく聴いている…そういう現実があることを、私たち神学生は謙虚に受け止めなくてはならないと感じました。つまり、説教は決して小手先の「ごまかし」が通用しないものであるともいえます。

科学文明が進み、たとえ多くの人々の心が神から離れようとも、聖書を通して語られる神の言葉に聴き続ける教会の歩みには、変わらないものがあります。説教者とは、聖書に顕された神の救いを自分の思いによって薄めたり歪めたりすることなく、神の語られるままに聴き、語られるままに語って教会に仕える者であること。このことを、この夏の体験を通して実感しました。

聖書とは何か？神の言葉とは何か？信仰とは何か？救いとは何か？…私のような神学生には、分かっているようで分かっていない言葉が数多くあります。そうした言葉の格闘から逃げることなく、常に神の言葉に聴き、神に問い、神の答えを乞い願う者として、また、神の恵みの下に生きる者として、私は残された神学校での学びを続けていきたいと思っています。

私を招いてくださった愛宕町教会の皆様と、熱くご指導してくださった北先生に、いつも主の祝福がありますように。愛宕町教会を通して私に必要なあらゆる糧を与えてくださった主の御名が誉め讃えられますように。